令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域１	教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

〇事前確認

前年度の自己点検・評価報告書から、伸長・改善計画、評価結果の課題事項を転記していますので、確認してください。

認証評価結果（自己評価委員会案）において指摘された事項について確認してください。

〈前年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	課題事項と伸長・改善方策（到達目標を含む）
1	中・高教職課程（英・日・社）では、やや控えめな学生や教員になる明確な意志を持たずに教職課程を履修する学生が見られるため、学生便覧をよく読むようにといった指導や、目指す教師像についての周知の徹底を図っていく必要がある。
2	中・高教職課程（英・日・社）では、専門及び教職科目担当者間の連携を一層強化し、教員としての専門性を高めることが必要である。
3	中・高教職課程（英・日・社）では、「教職履修カルテ」を用いた学生自身の振り返りや教員からのフィードバックを促しているが、活用状況にはバラつきが見られること、そして、深い専門性についてのカリキュラムが十分ではないため、特別授業などの充実、という２つが課題である。
4	教員養成サポートセンター所長は、教職課程の教員配置について教職課程認定基準を把握するよう努めているが、負担を軽減し人事委員会内での適時判断ができるよう、教職課程に関わる案件において人事委員会における教職事務担当者を位置づける必要がある。
5	各学科と全学組織の見地、全学的意思の統一をはかる難しさがある。
6	教員養成ＧＰ予算付与期間を過ぎて以降の予算管理及び設備管理･運用の組織的再配置を進める必要がある。
7	授業評価アンケートの担当部署から、結果提供を受けられるしくみをつくる必要がある。その上で、教職課程についてのＦＤ・ＳＤの取り組みにつなげることが必要である。
8	数値的な公表については年度更新を行っているが、全体的な情報について評価を受ける機会はこれまでなく、短大部との見せ方にも方針をたて統一性をもたせたい。

項目 No.	課題事項と伸長・改善方策（到達目標を含む）
9	中・高教職課程（英・日・社）では、着手して間もないため、現段階では課題として明確なものは見出していない。

〈前年度の評価結果（課題事項）〉

課題事項〈箇条書き〉　＊各項に課題事項を記載。該当がない場合は「なし」と記載。
項目１：目指す教師像が明確化しつつある学生が一定数いる一方で、目的意識が曖昧で指示待ちの姿勢が抜けない学生が散見される。免許取得に係る重要事項は自ら学生便覧で確認するなど基本的な指導を継続する必要がある。 項目２：国語の古典文法・漢文句法のテキストを専門科目と教職科目（教科教育法）で共通化し、連携して指導している。定着には時間を要するため、一層の連携が必要である。 項目３：なし 項目４：なし 項目５：全学で意思統一を図る機会を得ることにはなお困難があるが、全学教職担当者の意識統一は図られてきている。 項目６：なし 項目７：なし 項目８：数値公表にあたっては、数値の意味を適切に伝える工夫が必要と思われる。（開放制教職課程では教員免許を取得しない学生や免許は取得してもすぐには教職に就かない学生も多いが、一般に高校生等は在籍学生数全体を分母と捉える傾向がある） 項目９：なし

〈【参考】認証評価結果（自己評価委員会案）における指摘事項〉

＊認証評価結果（自己評価委員会案）は、最終的な認証評価結果の前段階にあたります。このため、今後、指摘内容に変更（削除を含む）が生じる場合があります。

総評における助言／是正勧告／改善課題

令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート　１

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域１	教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

１　対象年度における組織（自分）の状況について、自己点検・評価基準を参照し、「自己評価」欄に、「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅳ」の４段階で記入してください。

判定の目安

Ⅳ：　基準に十分に適合している

Ⅲ：　基準に適合しているが、継続的に保証する仕組みの構築が必要である。

Ⅱ：　部分的に適合していないため改善を要する。

Ⅰ：　基準に適合しているとはいえない。

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
１	教職課程教育の目的・目標を共有	①　教職課程の目的・目標を「卒業認定・学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて設定し、育成を目指す教師像とともに学生に周知している。	
２		②　育成を目指す教師像の実現に向けて、関係教職員が教職課程の目的・目標を共有し、教職課程教育を計画的に実施している。	
３		③　教職課程教育を通して育もうとする学修成果（ラーニング・アウトカム）が、「卒業認定・学位授与の方針」を踏まえて具体的に示されるなど、可視化を図っている。	Ⅲ
４	教職課程に関する組織的工夫	①　教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。	Ⅲ

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
5	教職課程に関する組織的工夫	②　教職課程の運営に関して全学組織（教員養成サポートセンター等）と学部（学科）の教職課程担当者とで適切な役割分担を図っている。	Ⅲ
6		③　教職課程教育を行う上での施設・設備が整備され、ICT 教育環境の適切な利用に関しても可能となっている。	Ⅱ
7		④　教職課程の質的向上のために、授業評価アンケートの活用を始め、FD（授業・カリキュラム改善、教育・学生支援体制の整備等）や SD（教職員の能力開発）の取り組みを展開している。	Ⅲ
8		⑤　教員養成の状況についての情報公表を行っている。	Ⅲ
9		⑥　全学組織（教員養成サポートセンター）と学部（学科）教職課程とが連携し、教職課程の在り方により良い改善を図ることを目的とした自己点検評価を行い、教職課程の在り方を見直すことが組織的に機能しているか、この自己点検評価を通じて機能しつつある。	Ⅲ

自己点検・評価シート　２

２　自己点検・評価

対象年度における組織（または授業担当者）の状況を自己点検・評価し、「点検項目」ごとに具体的に説明してください。

現状、「何を」規定または実施していて、「いつ」「どの会議で（誰が）」「どのように（指標・方法）」検証・分析を行い、「どのように（基準）」自己評価していますか。	
長所・特色（箇条書き） ＊先駆性や独自性があるもの、有意な成果が見られるもの、他の組織の範となるもの、自己評価・現状「Ⅳ」のもの	
課題事項〈箇条書き〉　＊伸長すべき点、改善すべき点	
項目 No. 6	・学校教育を取り巻く社会環境の変化を踏まえて、ICT 教育環境のさらなる伸長を期す必要がある。

３　伸長・改善に向けた取り組み

前年度の自己点検・評価の評価結果（【改善勧告】、【努力課題】、【留意点】等）への対応も含め、伸長・改善に向けた取り組みについて、第三者が理解できるように、根拠資料を用いて具体的に説明してください。

〈伸長・改善の進捗状況〉

対象年度における取り組み ＊成果の有無を問わない、前年度の自己点検・評価シート作成時点での計画の有無を問わない

〈今年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	

４　根拠資料

項目 No.	根 拠 記号	

令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域２	学生の確保・育成・キャリア支援

〇事前確認

前年度の自己点検・評価報告書から、伸長・改善計画、評価結果の課題事項を転記していますので、確認してください。

認証評価結果（自己評価委員会案）において指摘された事項について確認してください。

〈前年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	課題事項と伸長・改善方策（到達目標を含む）
10	大学全体として共通する「教師像」をメッセージとして出せているのか検討したい。
11	免許種や学科の特性を踏まえた「教師像」を担保するものであるか基準の評価の機会を定期的にもちたい。
12	各学科が設けている履修要件に照らして課程を運用しているが、適切な規模の履修学生となっているか、などは議論されていない。
13	「履修カルテ」により、学生は自らの教職への道のりを自己点検・評価することができるが、評価の基準であるその項目の内容の見直しやタイミングについて検討が必要である。
14	新入生オリエンテーションの教職課程ガイダンスの際に、「意向調査」を行うなどして早めに全体の希望を把握し、指導に結びつけることはできないか。対象者が把握できれば、働きかけも違ってくるのではないか。
15	教員採用試験対策として、教員採用試験の２次試験対策の体制を維持したまま、１次試験の実施体制を充実することで教員採用試験の合格率を上げるよう改善策をとりつつ点検を行っていく。
16	教員採用試験情報を、東北・関東地方の教育委員会からだけでなく外部機関からもより多く収集し在学生や卒業生に提供し、教員採用試験合格者の目標値を維持する。
17	法令等の理解を深めカリキュラム上の工夫を行う。
18	現職教員卒業生と教職志望の学生が直接交流できる機会を増やし、教員をめざす後輩たちの意識向上に役立てることができるように今後も継続していく。

〈前年度の評価結果（課題事項）〉

課題事項〈箇条書き〉　＊各項に課題事項を記載。該当がない場合は「なし」と記載。
項目 10：「大学全体として共通する『教師像』」とは何かをまず議論する必要がある。 項目 11：なし 項目 12：国語においては、一部の授業で学年によりクラス数（教員数）に対して履修学生数が過剰となり、増コマが必要になった。 項目 13：なし 項目 14：入学段階の「意向」は学修の実態を伴わないため、「教職概論」（１年後期）等の履修等を経た段階で現実的な志望の確認が可能になるのが現状と思われる。早期に対象を把握するには教職科目の授業を前倒しすることを併せて検討する必要がある。 項目 15：教採が３年次まで前倒しになってきている状況から、本学独自科目「教職研究Ⅰ～Ⅳ」の履修時期設定を再検討することも必要になると思われる。 項目 16：なし 項目 17：なし 項目 18：教員養成サポートセンターの尽力により交流が促進されている。今後とも継続したい。

〈【参考】認証評価結果（自己評価委員会案）における指摘事項〉

＊認証評価結果（自己評価委員会案）は、最終的な認証評価結果の前段階にあたります。このため、今後、指摘内容に変更（削除を含む）が生じる場合があります。

総評における助言／是正勧告／改善課題

令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート　１

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域２	学生の確保・育成・キャリア支援

１　対象年度における組織（自分）の状況について、自己点検・評価基準を参照し、「自己評価」欄に、「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅳ」の４段階で記入してください。

判定の目安

Ⅳ：　基準に十分に適合している

Ⅲ：　基準に適合しているが、継続的に保証する仕組みの構築が必要である。

Ⅱ：　部分的に適合していないため改善を要する。

Ⅰ：　基準に適合しているとはいえない。

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
10	教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成	①　当該教職課程で学ぶにふさわしい学生像を「入学者受入れの方針」等を踏まえて、学生の募集や選考ないしガイダンス等を実施している。	Ⅱ
11		②　「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて、教職を担うにふさわしい学生が教職課程の履修を開始、継続するための基準を設定している。	Ⅲ
12		③　「卒業認定・学位授与の方針」も踏まえて、当該教職課程に即した適切な規模の履修学生を受け入れている。	Ⅲ
13		④　「履修カルテ」を活用する等、学生の適性や資質に応じた教職指導が行われている。	Ⅲ
14	教職へのキャリア支援	①　学生の教職に就こうとする意欲や適性を把握している。	Ⅲ
15		②　学生のニーズや適性の把握に基づいた適切なキャリア支援を組織的に行っている。	Ⅲ

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
16	教職へのキャリア支援	③　教職に就くための各種情報を適切に提供している。	Ⅳ
17		④　教員免許状取得件数、教員就職率を高める工夫をしている。	Ⅲ
18		⑤　キャリア支援を充実させる観点から、教職に就いている卒業生や地域の多様な人材等との連携を図っている。	Ⅳ

自己点検・評価シート　2

２　自己点検・評価

対象年度における組織（または授業担当者）の状況を自己点検・評価し、「点検項目」ごとに具体的に説明してください。

現状、「何を」規定または実施していて、「いつ」「どの会議で（誰が）」「どのように（指標・方法）」検証・分析を行い、「どのように（基準）」自己評価していますか。	
長所・特色（箇条書き） ＊先駆性や独自性があるもの、有意な成果が見られるもの、他の組織の範となるもの、自己評価・現状「Ⅳ」のもの	
項目 No. 16	・教員養成サポートセンターから教職志望者に対して各種情報を適時適切に提供している。
項目 No. 18	・授業や教員養成サポートセンター主催行事で、卒業生教員を始め現職教員を招聘したり地域の協力校に出向いたりして、積極的に連携している。
課題事項〈箇条書き〉　＊伸長すべき点、改善すべき点	
項目 No. 10	・少子化の中、教職を志す学生の受入れには一層の努力が必要となっている。

３　伸長・改善に向けた取り組み

前年度の自己点検・評価の評価結果（【改善勧告】、【努力課題】、【留意点】等）への対応も含め、伸長・改善に向けた取り組みについて、第三者が理解できるように、根拠資料を用いて具体的に説明してください。

〈伸長・改善の進捗状況〉

対象年度における取り組み ＊成果の有無を問わない、前年度の自己点検・評価シート作成時点での計画の有無を問わない

〈今年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	

４　根拠資料

項目 No.	根 拠 記号	

令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域３	適切な教育課程カリキュラム

〇事前確認

前年度の自己点検・評価報告書から、伸長・改善計画、評価結果の課題事項を転記していますので、確認してください。

認証評価結果（自己評価委員会案）において指摘された事項について確認してください。

〈前年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	課題事項と伸長・改善方策（到達目標を含む）
19	中・高教職課程（英・日・社）では、学習支援ボランティアの組織的な実施、単位化の検討が課題である。
20	中・高教職課程（英・日・社）では、各教科の指導法に関する科目が２年次で完結し、３年次では教育の基礎的理解に関する科目を集中的に履修する形となり、双方の継続性の点で課題がある。
21	中・高教職課程（英・日・社）では、学校や教育委員会等の具体的なニーズや情報が十分とは言えず、本県及び近県等の学校及び教育委員会との連携強化が課題である。
22	中・高教職課程（英・日・社）では、ＩＣＴへの苦手意識をもつ学生がやや多い中で、担当教員がＩＣＴを活用した教育に関するスキルを身につけることが課題である。
23	中・高教職課程（英・日・社）では、授業手法としてのアクティブ・ラーニングは定着したため、学修効果を検証して深い学びを目指す授業改善が課題である。
24	中・高教職課程（英・日・社）では、日常の学修にシラバスを活用している学生もいる一方、あまり活用できていない学生もいる実態がある。シラバスの活用を促すことが課題である。
25	中・高教職課程（英・日・社）では、社会状況及び学生の実情を踏まえた履修要件の再検討、実習協力校の拡充が課題である。
26	中・高教職課程（英・日・社）では、大学入学直後の段階における教員志望の明確さに個人差があり、「教職履修カルテ」の活用についての意識が不十分な学生がいるため、具体的な指導方法の工夫が課題である。

項目No.	課題事項と伸長・改善方策（到達目標を含む）
27	中・高教職課程（英・日・社）の課題としては、教科の基礎学力に不安が見られる学生が多くみられることである。その対策としては正規のカリキュラムや教職研究の時間だけでは不充分であり、自主ゼミや個別指導が必要である。
28	中・高教職課程（英・日・社）では、インターンシップの扱いについての検討が課題である。本学では一般企業でのインターンシップについては既に単位化されているが、教職インターンシップについてはまだである。単位化の是非、単位化するにあたって中学校・高等学校との協力体制の構築などが必要である。
29	中・高教職課程（英・日・社）では、学生による地域の中学校・高等学校におけるボランティア活動の機会が十分確保できていない点が課題である。大学が郊外に立地していること、学生の多忙化などのため、中学校・高等学校からの要望に応えられていない状況である。
30	中・高教職課程（英・日・社）では、教育実習先の確保のため岩手県教育委員会との関係構築が喫緊の課題である。文部科学省の指導に従い、教育実習生を送り出す大学、教育実習生を受け入れる中学校・高等学校を含む協議会を設置するよう、岩手県教育委員会に強く働きかける必要がある。また、滝沢市や盛岡市と締結している包括協定を本学の教職課程を充実するために活用することを検討することも課題である。
31	協力校での実習受け入れ人数には限度があるため出身校での実習を行わざるを得ない状況となっているが、可能な限り多くの学生が協力校での実習を行えるよう、引き続き教育委員会や近隣学校及び幼稚園との連携を図っていく。

〈前年度の評価結果（課題事項）〉

課題事項〈箇条書き〉　＊各項に課題事項を記載。該当がない場合は「なし」と記載。
項目 19：開放制教職課程における学習支援ボランティアの単位化については検討すべき課題も多くあるため、先進事例等を研究する必要がある。 **項目 20**：各教科の指導法に関する学修継続について検討する必要がある。 **項目 21**：コロナ禍の収束により情報収集と連携が強化されている。 **項目 22**：開放制教職課程では一部に過ぎない教職科目で ICT を活用するだけでなく、日常的に専門科目でも教員が ICT を活用できる環境が必要であり、全学的な研修等が望まれる。 **項目 23**：なし **項目 24**：なし **項目 25**：本学は交通手段が限られるという地域事情を抱えているが、実習協力校の拡充は不可欠である。 **項目 26**：「教職履修カルテ」の入力と活用を促している。義務づけているため入力はしているが、活用実態は不明な点が多い。

項目 27：専門科目の教員と連携して基礎学力向上に取り組んでいる。年々多様な学習歴をもつ学生が入学する傾向が強まる中、対策の強化が必要である。 項目 28：項目 19 と同じく、先進事例等を研究する必要がある。 項目 29：中学・高校からのボランティア依頼はごく限られているうえ、交通手段が乏しいため授業日の実現は難しい。大学の長期休業中に希望者が活動できるなら可能か。 項目 30：今後の課題である。 項目 31：今後とも継続して取り組む必要がある。

＜【参考】認証評価結果（自己評価委員会案）における指摘事項＞

＊認証評価結果（自己評価委員会案）は、最終的な認証評価結果の前段階にあたります。このため、今後、指摘内容に変更（削除を含む）が生じる場合があります。

総評における助言／是正勧告／改善課題

令和６年度（対象年度：令和５年度）自己点検・評価シート　１

所属学部・学科名	文学部・日本文学科
責任者（又は記入者）	遠藤　可奈子

基準領域３	適切な教育課程カリキュラム

１　対象年度における組織（自分）の状況について、自己点検・評価基準を参照し、「自己評価」欄に、「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅳ」の４段階で記入してください。

判定の目安

Ⅳ：　基準に十分に適合している

Ⅲ：　基準に適合しているが、継続的に保証する仕組みの構築が必要である。

Ⅱ：　部分的に適合していないため改善を要する。

Ⅰ：　基準に適合しているとはいえない。

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
19	教職課程カリキュラムの編成・実施	①　教職課程科目に限らず、キャップ制を踏まえた上で卒業までに修得すべき単位を有効活用して、建学の精神を具現する特色ある教職課程教育を行っている。	Ⅲ
20		②　学科等の目的を踏まえ、教職課程科目相互とそれ以外の学科科目等との系統性の確保を図りながら、コアカリキュラムに対応する教職課程カリキュラムを編成している。	Ⅲ
21		③　教職課程カリキュラムの編成・実施にあたり、教員育成指標を踏まえる等、今日の学校教育に対応する内容上の工夫がなされている。	
22		④　今日の学校における ICT 機器を活用し、情報活用能力を育てる教育への対応が充分可能となるように、情報機器に関する科目や教科指導法科目等を中心に適切な指導が行われている。	Ⅲ

項目	基準評価項目	評価の視点	自己評価 現　状
23	教職課程カリキュラムの編成・実施	⑤　アクティブ・ラーニング（「主体的・対話的で深い学び」）やグループワークを促す工夫により、課題発見や課題解決等の力量を育成している。	Ⅳ
24		⑥　教職課程シラバスにおいて、各科目の学修内容や評価方法等を学生に明確に示している。	Ⅲ
25		⑦　教育実習を行う上で必要な履修要件を設定し、教育実習を実りあるものとするよう指導を行っている。	Ⅲ
26		⑧　「履修カルテ」等を用いて、学生の学修状況に応じたきめ細かな教職指導を行い、「教職実践演習」の指導にこの蓄積を活かしている。	Ⅲ
27	実践的指導力育成と地域との連携	①　取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する機会を設定している。	Ⅲ
28		②　様々な体験活動（介護等体験、ボランティア、インターンシップ等）とその振り返りの機会を設けている。	Ⅲ
29		③　地域の子どもの実態や学校における教育実践の最新の事情について学生が理解する機会を設けている。	Ⅲ
30		④　大学ないし教員養成サポートセンター等と教育委員会等との組織的な連携協力体制の構築を図っている。	Ⅲ
31		⑤　教員養成サポートセンター等と教育実習協力校とが教育実習の充実を図るために連携を図っている。	Ⅲ

自己点検・評価シート　２

２　自己点検・評価

対象年度における組織（または授業担当者）の状況を自己点検・評価し、「点検項目」ごとに具体的に説明してください。

現状、「何を」規定または実施していて、「いつ」「どの会議で（誰が）」「どのように（指標・方法）」検証・分析を行い、「どのように（基準）」自己評価していますか。	
長所・特色（箇条書き） ＊先駆性や独自性があるもの、有意な成果が見られるもの、他の組織の範となるもの、自己評価・現状「Ⅳ」のもの	
項目 No.23	・学生が輪番で教育時事に関する話題でプレゼンし、グループディスカッションを経て教育現場が目指すべき方向性を議論している。
課題事項〈箇条書き〉　＊伸長すべき点、改善すべき点	

３　伸長・改善に向けた取り組み

前年度の自己点検・評価の評価結果（【改善勧告】、【努力課題】、【留意点】等）への対応も含め、伸長・改善に向けた取り組みについて、第三者が理解できるように、根拠資料を用いて具体的に説明してください。

〈伸長・改善の進捗状況〉

対象年度における取り組み ＊成果の有無を問わない、前年度の自己点検・評価シート作成時点での計画の有無を問わない

〈今年度の伸長・改善計画〉

項目 No.	

４　根拠資料

項目 No.	根 拠 記号	